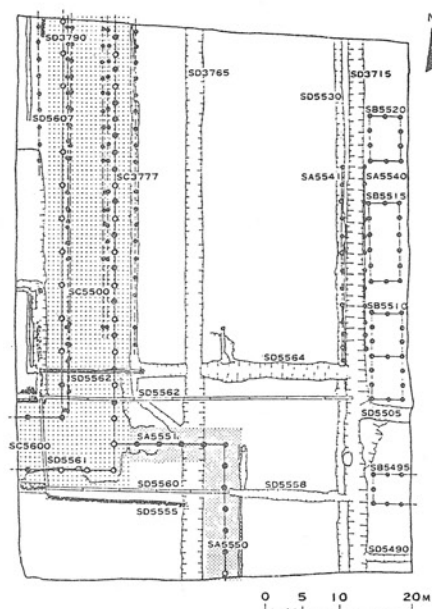


奈良・平城宮跡（第一次調査）

- 1 所在地 奈良市佐紀町
- 2 調査期間 一九六七年（昭42）七月～一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 杉山信三
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第一次調査地は平城宮第一次大極殿院築地回廊東南隅付近で、第一次朝堂院区画施設との接合部を含む地域である。面積は四二〇〇㎡である。

検出した主な遺構は、大極殿院東面築地回廊SC五五〇〇、南面築地回廊SC五六〇〇、朝堂院の東北隅部分を区画する掘立柱塀で、後に築地に改作されるSA五五五〇・五五五一、宮内基幹排水路の南北溝SD三七六五、SD三七六五を東に移動して設けられた南北溝SD三七一五、SC五五〇〇の西側雨落溝SD三七九〇、東側雨落溝SD五五七五、SD五五七五から南東に流れてSD三七六五に注ぐSD五五八四、大極殿院内の排水を受けSC五六〇〇を横断する暗渠SD五五五六、SD五五五六から東へ折れSD三七六五に流



入する暗渠SD五五五五、SD五五五六を改作したSD五五六一、SD五五六一から東へ折れる暗渠SD五五六〇、SD五五六〇から東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五五八、SC五五〇〇を横断しSD三七一五に排水する東西暗渠SD五五六二、SD五五六二の北で同じくSC五五〇〇を横断する暗渠SD五五六三、SD五五六三から東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五六四、第二次大極殿・朝堂院地域からSD三七一五に流入する東西溝SD五四九〇・SD五五〇五などである。このうちSA五五五〇・五五五一は霊亀頃以降に設けられ、それに伴いSD三七六五が東に移動しSD三七一五となる。

木簡が出土したのは、SD三七六五、SD三七一五、SD三七一五の西岸にあり、同溝よって破壊されている土壌SK五五三五、SD五五六四、SD五四九〇の五カ所である。

SD三七六五は幅一・六～二・六m、深さ〇・六mで、木簡から和銅年間に存在したことがわかる。一点出土したが断片が多い。

SD三七一五は幅二～三m、深さ一mで、堆積土は上下二層に大別できるが、水流のためか乱れがあり、層位による時期・内容の区分はできない。七六五点出土したが上層からの出土が多い。木簡の年紀から溝が霊亀頃から奈良末まで存続したことがわかる。

SK五五三五は幅一・八m、深さ〇・三mの不整形の土壌で、霊亀元年（七一五）銘のあるものを含む一七点の木簡が出土した。

SD五五六四は幅二～三m、深さ〇・六mで、堆積状況からするとSD三七一五が逆流した形跡があり、木簡の性格もSD三七一五のものと同類とみなしうる。八点出土した。

SD五四九〇は幅一m、深さ〇・二mある。木簡は七三点出土したが判読不能のことが多い。

8 木簡の釈文・内容

SD三七一五から内容的に興味深いものが多数出土しているが、その中では兵衛府・中衛府に関するものが注意される。兵衛府から中衛府に宛てたものがあるので、中衛府あるいはその関連の官衛・施設で廃棄されたとみられる。人名を列記したものがあるが、中衛

の交名であろうか。中衛府は神亀五年（七二八）から大同二年（八〇七）まで存続し、内裏周辺の警衛や供奉に従っていたとみられるので、木簡が廃棄地点からあまり流下していないとすれば出土地近辺に中衛府の詰所的施設のあった可能性が考えられる。

付札では貢進物荷札は少なく、海産物等の食料品の物品付札が多い。出土場所からみて内裏などでの宴会用の食料品であったかもしれない。

このほか『続日本紀』神護景雲三年六月乙巳条の任官記事とほとんど一致する記載のあるものが注目される。

年紀の知られるものは神護景雲三年が右記のものを含め三点、宝亀元年が一点あり、他の木簡もこの時期頃のものとして矛盾しない。

溝SD三七六五

(1) 和銅□ 091

(2) 〰一之郡末滑海× (81)×17×4 039

(3) □以前等三物 091

(4) 『更級郡』

□□忍麻呂前

・謹人□『謹□』

(140)×12×4 081

(5) □□□□魚八斤五兩

(117)×6×4 081

(8) ・「請繩參拾了 右為付御馬并夜行馬所請」

・「如件 神護景雲三年四月十七日番長非淨浜」

323×25×4 011 *

溝SD三七一五

(6) 兵衛府移中衛□_[府力]

091

(9) 兵衛等充行夜使如件

091

(7) ・×衛府移 中衛府

一番正八位下□□□_[賀茂力]

(10) ・「真竜列 □部真神 物部老」

・×□仍故移

(192)×11×3 081 *

・「阿奈石□□□人合四人」_[赤力]

152×13×4 011 *

(11) ・「式部大□_[輔大伴益立]

伊賀守伊勢子老 遠江介藤井川守 出雲□□_[守布力]

内倉介安□_[倍]草万呂

美野守石上息繼

周方守弓削秋万呂 兼勢□□_[人主]

伊与守高円広□_[世力]下総員外□_[介力]

桑原王□_[兼力]

・「下野介当□_[麻王]

□_[伊伎力]守田部息万呂

□_[右兵衛]介弓削広□_[方]

能登□_[守石川人麻呂]

左馬司頭牟□_[都支力]王

右大舍人介□_[文屋力]万呂

員外介□_[弓削薩]□_[麻]

右衛土督備泉

玄蕃□_[助]相模波□_[伊波力]

343×37×3 011 *

半大初位上若湯坐

135 × 15 × 5 051
「少志」
(13)

$$\bullet \left[\begin{array}{|c|} \hline \\ \hline \end{array} \right] (203) \times (41) \times 2 \quad 081$$

六月六日雀部石麻呂
(175)×25×2 081

(16) 厨 請飯

〔依員力〕

四月 (97) × (26) × 3 081

(17) 請食石寸建万呂作日朝夕者

四月廿四^{〔日力〕}□□^{〔廿力〕}東万呂附^{〔〕}

(18) 「請酒壺斗伍升」□

●
☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐
 (将監曹司) (請力)

(62) $\times (26) \times 2$ 081

(19) 野中大成

海部稲〇〇 (109) × (24) × 3 081

三斗九升

主税大允船 ☐ 〔住力〕

田益足 凡河内小成

091

(23) 民金麻呂

(24) ×比 葛木毛人 余□□

合四人

□少属従七上輕部造兄□

$$(26) \quad \begin{array}{c} \bullet \\ \hline \square \\ \square \\ \square \end{array}$$

〔万呂力〕
〔繩力〕

景雲二年八月三日 (303) × (50) × 5 081

